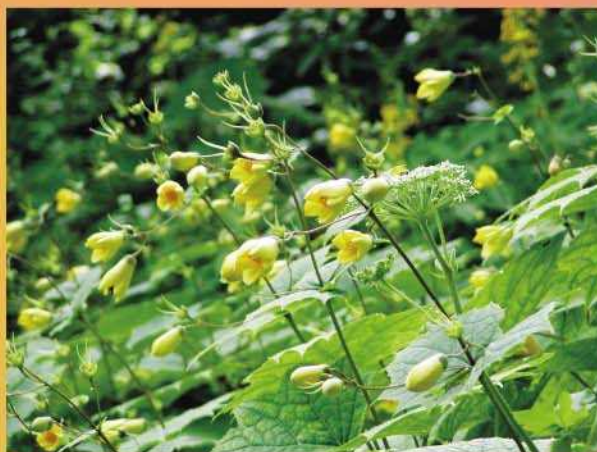


周辺の文化財



● 川井のエドヒガン（徳島県指定天然記念物）
樹齢約500年の老樹。「川井の大桜」と呼ばれ、親しまれている。毎年多くの花を咲かせる。

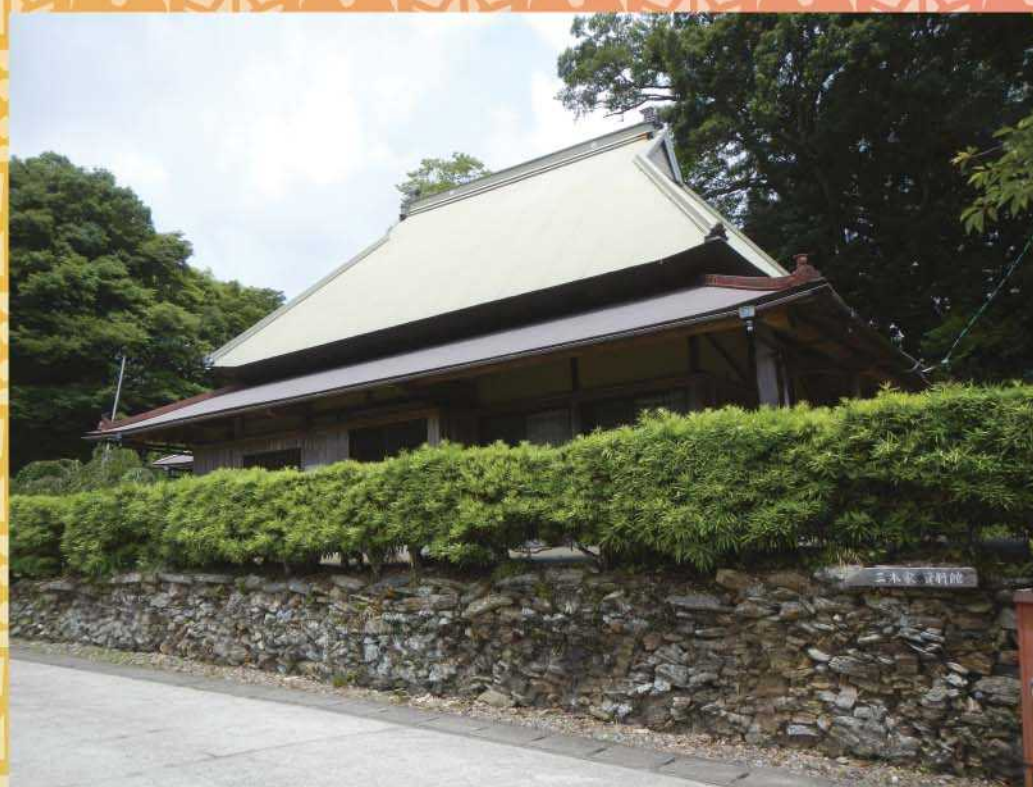
● キレンゲショウマ（美馬市指定天然記念物）
ユキノシタ科の多年草。剣山に自生。
開花時期は7～8月。



三木家資料館

三木家は、上古以来、せんそだいじょうさい 踐祚大嘗祭に御殿人としてみあらかんど 僮服あらたえを調進してきた。

当資料館では、平成の僮服調進に関する資料を中心に、三木家文書の写真などを展示している。



アクセスマップ



交通アクセス

- マイカーをご利用の場合
徳島自動車道脇町ICから約60分
(約31km)
- タクシーをご利用の場合
穴吹駅から約50分 (約28km)
(所要時間は、道路状況等により異なります)

お問い合わせ先

- 美馬市教育委員会
徳島県美馬市穴吹町穴吹字九反地5番地
TEL (0883) 52-8011
FAX (0883) 53-8890
E-mail bunspo@city.mima.lg.jp

- 美馬市木屋平総合支所
徳島県美馬市木屋平字川井161番地
TEL (0883) 68-2112

美馬市
美馬市教育委員会

あらたえ 平成の 鹿服調進

平成の鹿服調進は、麻を栽培する畑を整地することから始まった。4月上旬に種をまいた麻が高さ約10cmに成長したころ、1回目の間引きをし、土寄せをした。2回目の間引きは、約30cmに成長したころに行った。

播種から100日ほどたったころ、3m前後に成長した麻の収穫が行われた。収穫後、まず麻の葉と根を取り除き、180cmの長さに切り揃える。30本ほどに束ねられた麻茎を麻釜で沸かした熱湯で2分ほど煮た後、約1週間天日で干し上げた。これは繊維を丈夫にし、害虫を殺すためである。さらにカビを防ぐため、2度目の麻煮を行い（上げ湯という）、天日干しした後、乾燥した場所で保管した。



麻煮作業



麻挽き作業



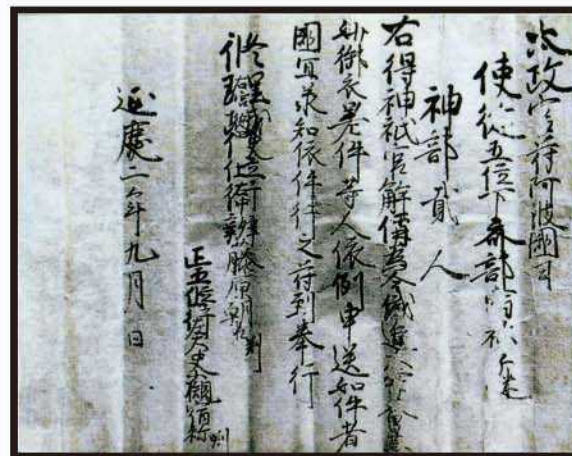
三木家資料館

次に、乾燥させた麻の茎を水が張られた麻舟おぶねに浸した後、そこから取り出した麻の茎に箆おびを掛けて2日間ほどかけて発酵させ、皮を剥いていった。最後に、剥ぎ取った皮を麻挽き台おびにのせ、「麻かき」と呼ばれるヘラ状の道具で表皮を取り除いていった。この作業を「麻挽き」という。麻挽きをすることで麻は金色に仕上がり、さらにそれを竹竿にかけて3～4日陰干しにすることで、精麻せいまとなる。



紡女の巫女装束

8月に入り、三ツ木八幡神社みつぎ はちまんで初紡ぎ式が行われた。巫女装束の5人の紡女つむぎめが、細かく裂いた麻の繊維をつなぎ、1本の長い糸に紡いでいった。糸車を使って撚りをかけ、糸を紡いでいく姿は、往事の情緒をしのばせた。できあがった糸は山崎忌部神社やまさきいんべ（吉野川市山川町）へ送られ、鹿服に織り上げられた。



三木家文書

「太政官符案」延慶二年九月
(花園天皇大嘗会に関するもの。)

三木家は阿波忌部氏の直系で、三ツ木という地名に由来する苗字を名乗っているが、「忌部」姓が三木家の本姓である。上古以来、歴代の踐祚大嘗祭の際に御殿人みあらかんどとして鹿服を調進し、朝廷と深いつながりを持っていた。

三木家には、鎌倉時代から室町時代の古文書（徳島県指定有形文化財「三木家文書」）が伝えられており、その中で、亀山天皇（文応元（1260）年）から光明天皇（暦応元（1338）年）の大嘗祭において、御殿人として鹿服を調進してきたことが記されている。

南北朝の動乱以降、鹿服の調進は長く中断していたが、大正の大嘗祭で復活し、昭和の大嘗祭へと受け継がれた。また、平成の大嘗祭では、旧木屋平村（美馬市木屋平）・旧山川町（吉野川市山川町）など、大勢の方々の支援と協力により鹿服を調進した。

三木家と鹿服調進

三木家は阿波忌部氏の直系で、三ツ木という地名に由来する苗字を名乗っているが、「忌部」姓が三木家の本姓である。上古以来、歴代の踐祚大嘗祭の際に御殿人として鹿服を調進し、朝廷と深いつながりを持っていた。

三木家には、鎌倉時代から室町時代の古文書（徳島県指定有形文化財「三木家文書」）が伝

アサ (学名: Cannabis sativa)

中央アジア原産、アサ科の一年生草本。栽培条件により高さ3～6mになる。雌雄異株。茎などから繊維が取れ、果実は食用となる。日本には弥生時代に渡来し、以降、繊維利用や食用などの目的で広く栽培されてきた。

(『日本帰化植物写真図鑑第2巻』参考)



麻の収穫作業（現在、麻畑はあじさい園になっている。）